

二つの三種三観

野 本 覚 成

天台学で三種三観は、別相（次第）三観・通相三観・一心三観を総称するもので、空仮中三観を運用するのに三段階があることを説くものである。三観は天台智顛の著述中のあらゆる箇處で説かれるほど重要な法門でありながらも、その運用に三種の段階を設けて述べているのは、晩年の勅撰書である『維摩文疏』二十八巻中のみと言われている。古來この三種三観のうち通相三観について説明される場合は必ずといえるほど『維摩文疏』を引用、または順じているようである。つまり通相三観についての説明は『維摩文疏』のみが存在するからであろう。三種三観のうち別相・一心の二種の三観については『維摩文疏』以外にも説かれているが、二種の説明にさらに通相三観を加えた三種三観となっていない点が、『維摩文疏』の三種三観説を注目させるのである。しかも、全体を通じて説明されておらず、『維摩經』問疾品を解釈する部分においてのみなのである。三種三観説はいうまでもなく教觀二門のうち觀門に属するものである。しかし『維摩文疏』は教門に属する選述であり、『維摩經』の文釈を述べる本書のみに三種三観説が述べられるのは、いかなる理由があるのであろうか。また觀門の著述に三種三観説は全く存在しないのであろうか。別相・一心三観に新たに加説された通相三観の内容は、前兩者とどのような觀法理論關係をもち、また通相三観

に相当する構想は『維摩文疏』以外の撰述には全く説かれていないのであろうか。これらの点を考えて見る上で、まず『維摩文疏』の説明を見よう。『維摩文疏』二十一で『維摩經』問疾品の「維摩詰言有疾菩薩應作是念今我此病皆從前世妄顛倒諸煩惱生無有実法誰受病者」を釈して「此是第二淨名答正約三觀明三調伏也所以然者三觀破三種煩惱即是修三智明三調伏界内通教別教四教三種菩薩実疾亦是調伏三土菩薩因果之実疾也」（『元統藏』一・二八・二、二十一卷百十六丁左）としてこの經文に続いて疾を除くために淨名（維摩詰）は三の答を述べているとして、三観の説明をする。つまり、百十六丁左～百十八帖左までに空觀を、百十八丁左下～百二十一丁左上までに假觀を、百二十一丁左上以下が中道正觀を説くとして、それぞれ界内見思疾、恒沙無知病、無明実病を調伏するといひ、淨名が文殊に答を述べて有疾の菩薩を調伏することは前の『三觀玄義』に具体的に明かしているという。そして今は「須更略分三別三觀之相」として、別相三觀、通相三觀、一心三觀を説く。しかし現存する『三觀玄義』には通相三觀は説かれてはいない。従つてここでのみ述べられる通相三觀を見てみよう。（一）内筆者

「二通相三觀者。則異於此（別相三觀）從假入空非但知俗假是空真諦中道亦通是空也。若從空入假非但知俗假真空空道亦通是假。若入中道正觀非但知中道是中俗假真空空道亦通一切空無假中而不假。一假一切假無空中而不假。一中一切中無假空而不中。但以二觀當名解心無不通也。雖然此是信解虛通就觀位除疾不無患尺前後之殊別也」（前同）

として別相三觀は別教にあつて歴別に三諦を觀するが通相と一心の三觀はまさしく円教に属すると、続けて説明している。そして『維

『摩經』全十四品のうち問疾品五、不思議品六、觀衆生品七、仏道品八、入不二法門品九の室内六品（正宗分のほぼ後半）は三觀を説明して正しく通相三觀の意、あるいは一心三觀を用いているという。ここで疑問となるのは円教の觀として兩者を説く必要は何であるかということであろう。智顛みずからこの点を問答している。「問此兩觀既立は円教何意為_レ兩。答曰通相三觀約_レ通（教）論_レ円（教）論_レ此恐是方等教帶三方便之円非_レ如_レ法華所_レ明也」（前同百十七丁右）つまり一心三觀は法華の所明であるが通相三觀は帶權円の觀で純円の觀でなく、『維摩經』は室内六品に円教の觀を説いているがこの兩者が渾然と説かれている点に注意したものと考えられるのである。通相三觀をあえて説く意味は、『維摩經』でなくては説けない事情が存すること、つまり『維摩經』を文釈するためには、円教の觀法に微妙に異なる二つの觀法があり、これを認知しなければ意味を理解できないこと、『法華經』との差を理解できないこと、などの点を注意したものと理解される。いわば相待円と絶待円の觀法がこの兩觀法の意味するところと理解すべきであろう。しかし、通相三觀の觀法がどのようなものであるかは、前引用のみの説明では理解するうえで十分とは思えず、この説明に相当する他の撰述の説明を見ることにしたい。一空一切空、一仮一切仮、一中一切中は原理としての一空または一仮、一中が一切に適用されるべき觀法のことを述べたものと考えられ、完全な空觀は仮中すらも空觀とならないことはなく、仮觀・中觀も同様で三即一、一即三の構想が通相三觀の意味で（一心三觀は一念心の不可得・不可説を知り、三諦を円かに觀じて即空即仮即中とする違いがある）これは『摩訶止觀』をざつと見たただけもかなりの箇處で触れている。「一は一切」というパターン表現は

二つの三種三觀（野本）

『大正藏』四六卷2 a、3 b、5 a、7 a、9 b、17 b、51 b、52 a、55 b（これは一心三觀の説明のうちに含まれている）、59 c、61 c、75 b、88 b c、90 c、100 c、114 a、116 b、140 bなどで、内容的に重要なものは51 b以下の第七章正修止觀に説かれるものである。これは一心三觀の説明または不思議觀の内容に相当すべく説かれており、特に55 bの一念三千のあとに説かれる通相三觀に相当する内容は、『摩訶止觀』に通相三觀の名は出ないが内容は存在することを教えるものである。また『法華玄義』『法華文句』にも詳しい説明はないが同類の語句がある。しかし以上は何れも断片的で、通相三觀が実際にどのように運用され、無明を調伏する別相三觀の中觀以上の通相三觀とは自己にとつてどのような觀法か明らかではない。この点は三觀の概論書『三觀義』二巻でも十分でない。さらに詳細な『摩訶止觀』十乘觀法の第四破法偏を手掛りにすることがもつとも適切であろう。別稿（天台学報十八）で触れたように、破法偏は智顛自身の経験と仏教理論が詳細に、一念三千説の七倍もの頁数を占めて説かれているものである。これは豎（別相三觀）、横、横豎不二（一心三觀）の組織で説かれ煩惱病疾を破し尽すという内容で三觀の運用を述べたものである。この横の破法偏は別相と一心の間であり、別相三觀を諸法門に適用することを述べ、内容的には通相三觀のそれと類同である。しかし一空一切空など一連の語句はなく、「三觀一心」の語がその代表である。この破法偏の組織は、実は三種三觀の運用を述べたものではないか、三種三觀には理論的説明と実践的説述の二つの三種三觀が存在するのではないかと考えられるのである。（さらに別稿で述べたい。）